鶴永いくお

誘う人妻のせいで

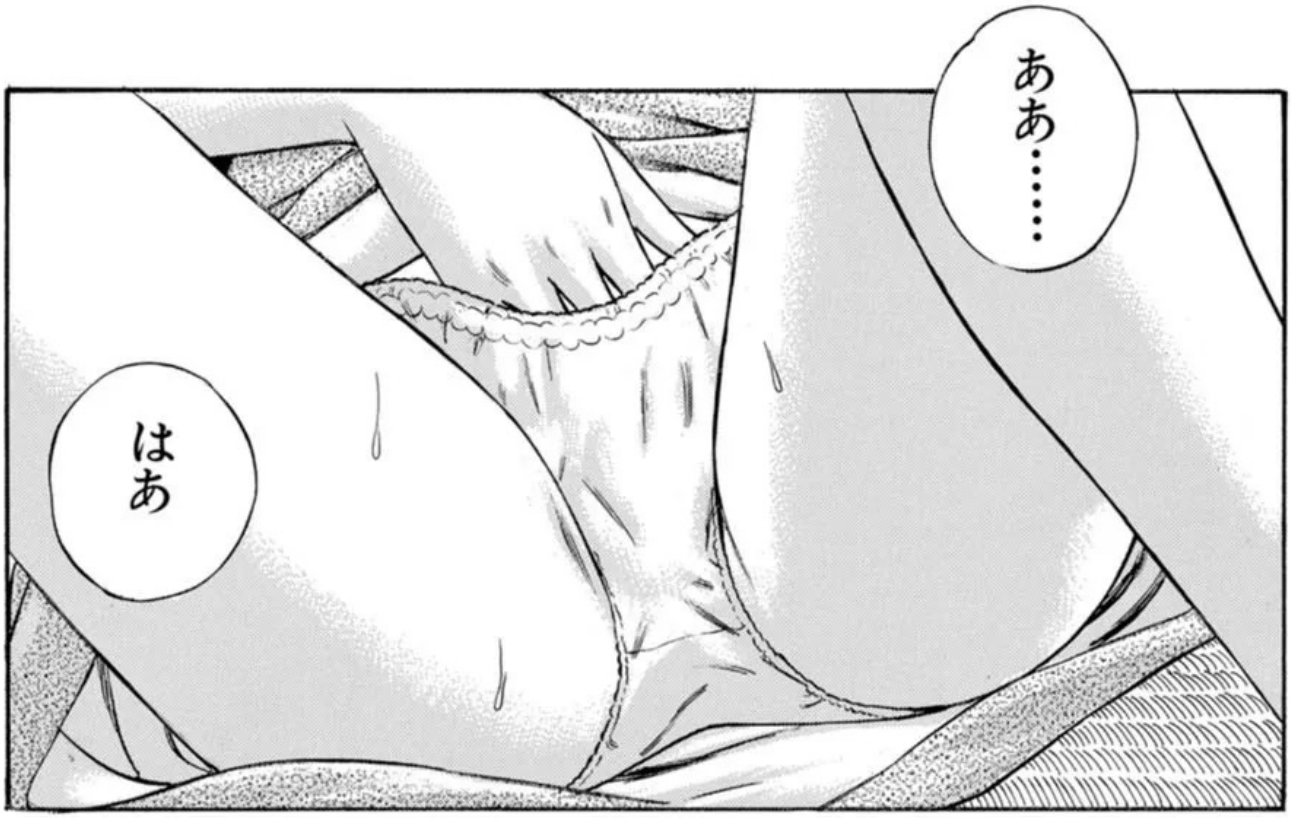
～淫らに咲き乱れる熟した肢体～



誘う人妻にのせられて
～淫らに咲き乱れる熟した肢体～

第１話




ああ……
はあ


ふっ
はっ
ああ……
んっ
あっ

僕が由里絵さんの
その姿を
偶然覗き見た
のは15歳の
夏でした

ふう

ふう

ふっ

由里絵さんの
夫は僕の
伯父で……

その年の冬
登山に行ったきり
戻ってはきま
せんでした

未亡人になった
由里絵さんは
それから生花教室
などをひらいて
ひとり暮らしして
います

あら
圭一郎くん
ずいぶん背が
伸びたわね

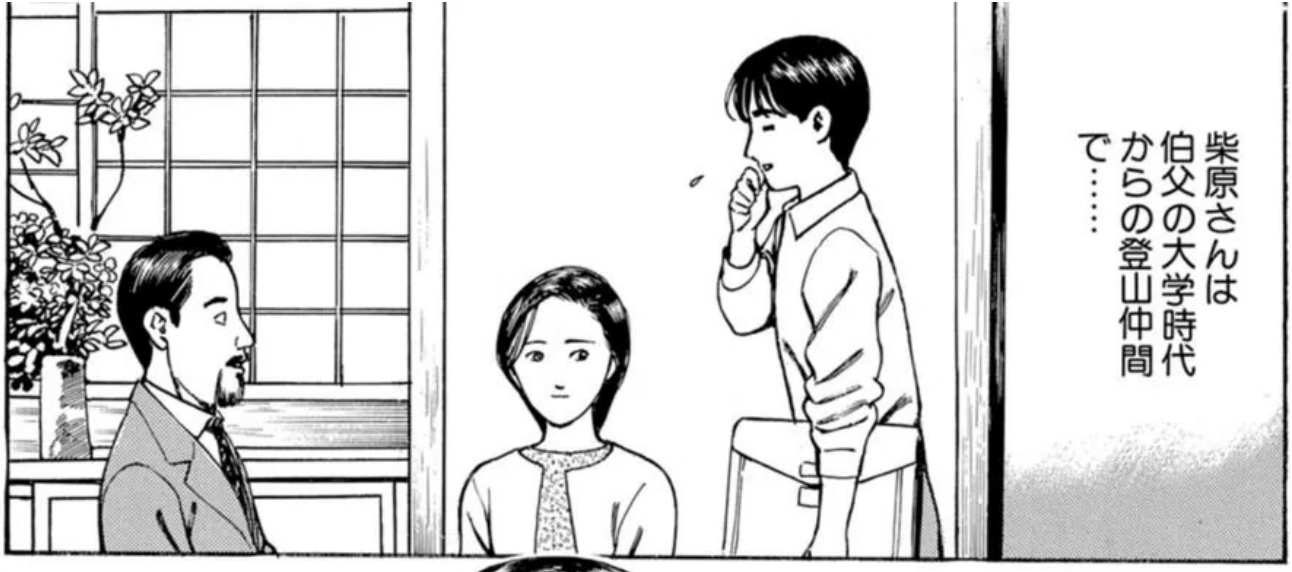
ほら　わたしより
顔半分ぐらい
高くなった

由里絵さんの
秘密を覗き見た
日から3年

由里絵さんは
いつも
変わらず
きれいで……

やあ
圭一郎くん
おじゃま
しているよ

どうも
こんにちは


柴原さんは
伯父の大学時代
からの登山仲間
で……


しかし
由里絵さんは
いつも
清らかで美しい


いやだわ
柴原さん
そんなこと
ありませんよ


本当です
しとやかな雰囲気は
昔のままだ


圭一郎くんは
よくここへ
来るんですか
家じゃ　弟が
うるさいからって
主人の書斎で
勉強するんです


もう3年ですか

そういえば圭一郎くんはどことなく山内に似てきましたね

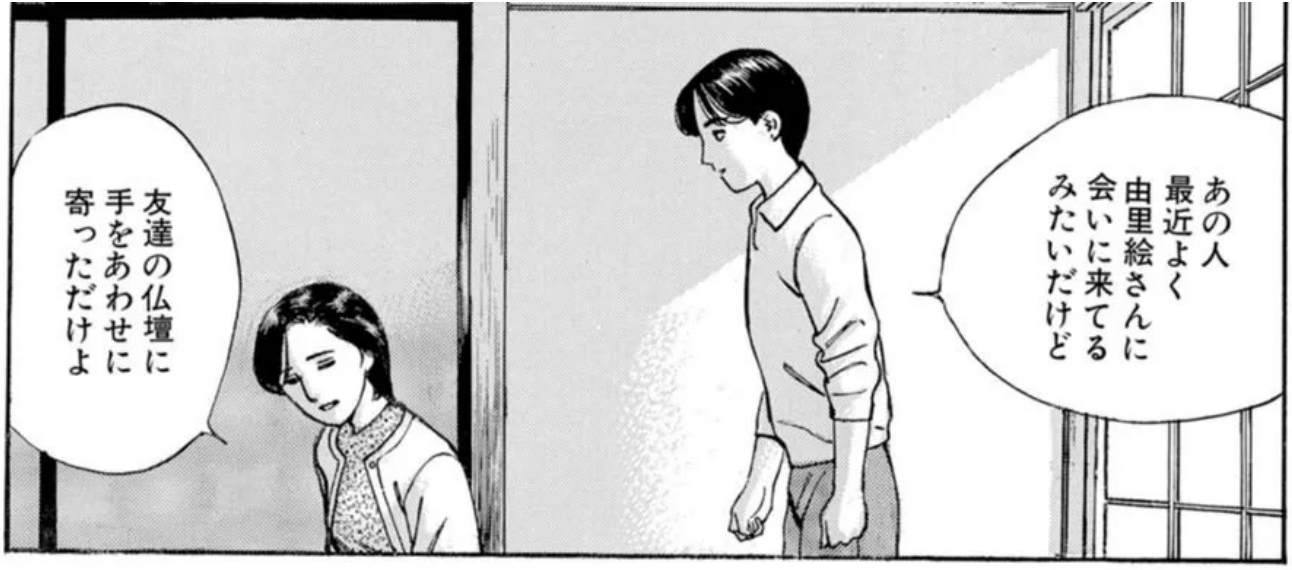

そうですか
ええ ちょっとはにかみ屋のところなんか


由里絵さんは清らかで美しい

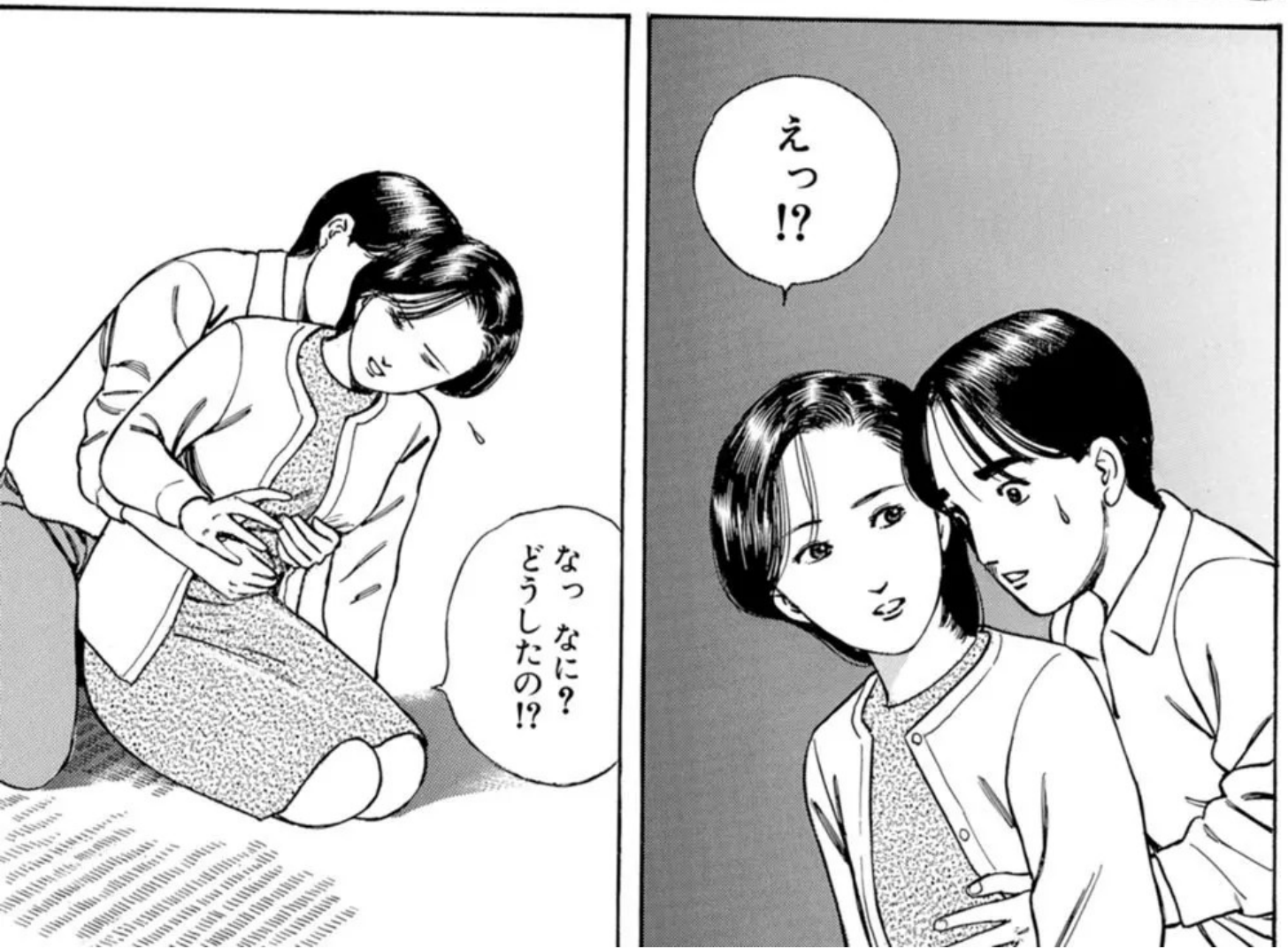

柴原さん帰ったの




今日は由里絵さんの元気な顔が見れてよかった


あの人
最近よく
由里絵さんに
会いに来てる
みたいだけど
友達の仏壇に
手をあわせに
寄っただけよ


柴原さん言ってたわ
圭一郎くん　最近
あの人に
似てきたって
そうかな
他人には
似て見える
のかも
しれないわね


えっ!?
なっ　なに?
どうしたの!?


や…やめなさい
なんの真似!?
ドサッ
僕…ずっと
由里絵さんの
ことが
好きだった
なっ
なにを言ってるの?
僕は
わかっているよ
由里絵さんは
清らかで
しとやかなだけ
じゃないって


由里絵さんの足……
スッ
ああだっだめ!!
僕の手
由里絵さんのお尻にじかに触れている
はっ
はっ


だから
無理やりなんて
できないよ
ただ
見たいだけ
本当だよ


由里絵さんの
裸が見たい


む…無理を
言わないで
わたしはあなたの
伯父さんの妻なのよ


うそ
見たら
それ以上のことを
したくなるわ
きっと


約束する
本当だよ
なんなら手を
縛ったってかまわないよ


じゃあ…


お風呂場に
行きましょ


お風呂場でなら
裸になっても
平気なの？
えっ……
ええ
10分
10分経ったら
入ってきて
入るよ
由里絵さん


チャ〜


ゴクッ


どうすれば
いいの？


こっここへ
すわって

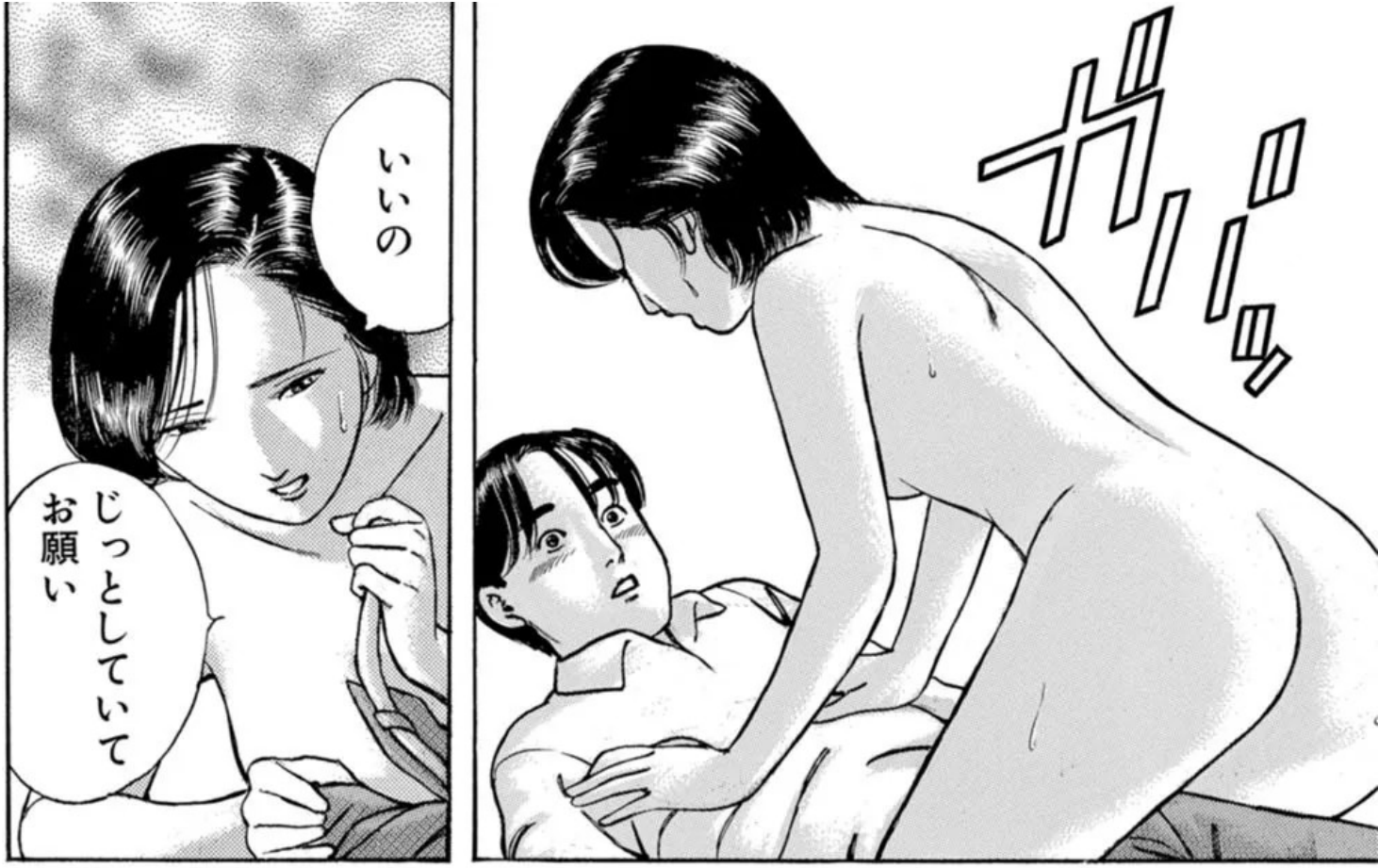



こっちを向いて
手をどけて
あっ…足を開いてくれる
ああ…圭一郎くん
こっこれでいいの
はっ
はっ


僕は手を出さないから
自分の手で
広げて見せて
ふっ
ふっ
はっ
はっ
見るだけ
本当に
見るだけよ

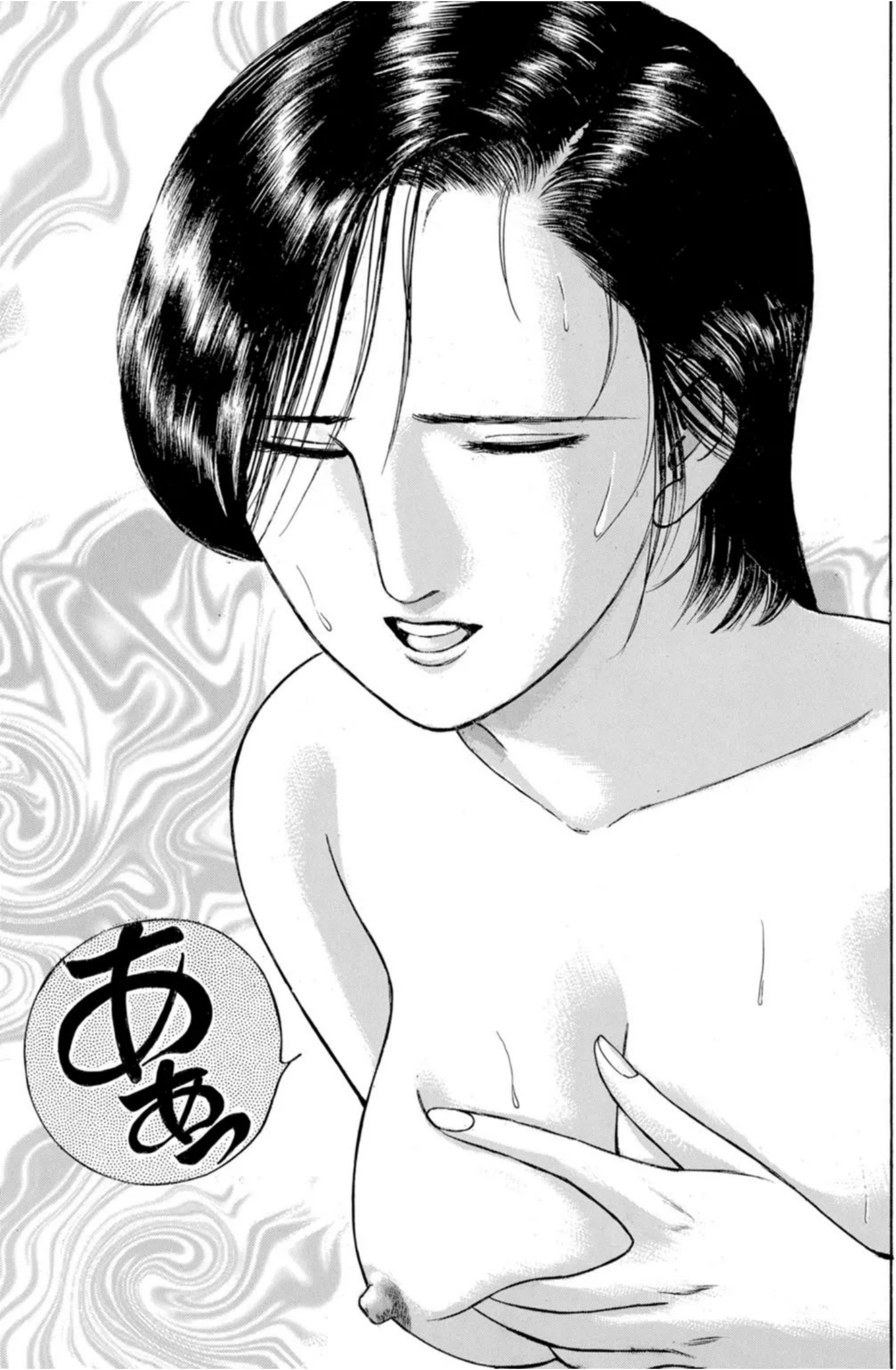

ほんの少し
触るだけ
なら……
ねっいいでしょ
だ だめ
約束でしょ
本当に
ほんの
少しだけ
ああ
そんなこと
……


触るだけよ
本当に……
それ以上は……
はっ
はあ
ふっ
ふう
ああ……
ちゅ
ぴちゅ


ガバッ
いいの
じっとしていてお願い


わたしも圭一郎くんのことが好きよ
こんなことを心のどこかで望んでいたのかもしれない


ああ……
ゆっ…由里絵さん
あ…
ズボ


あぁ


あっあっ
ザアアア…
やあ
あっ
どうも
熱心だな
今日も伯父さんの
書斎を借りて
勉強か
ええ
柴原さん　今日は？
わたしは
もう帰るところだ
由里絵さんも
ひとり住まいだから
君のような男の子が
ちょくちょく訪ねて
くれたら心強い
だろうね
どうかな
あまり
たよりになる
タイプじゃ
ないから


やっぱり
似てるな
え？
いや
なんでも
ない
それじゃ
あの
ふられたよ
山男はもう
こりごりだ
そうだ
好きな人でも
できたような
口ぶりだったな
君は相手の人とか
知っているのか
柴原さん
由里絵さんのこと
好きなんでしょ
さあ
そうか
でも
そんな人たぶん
いないと思い
ますよ
サアアアア


こっちょ
圭一郎くん
由里絵さん
ガラララ
ガチャ
いらっしゃい

誘う人妻にのせられて
～淫らに咲き乱れる熟した肢体～

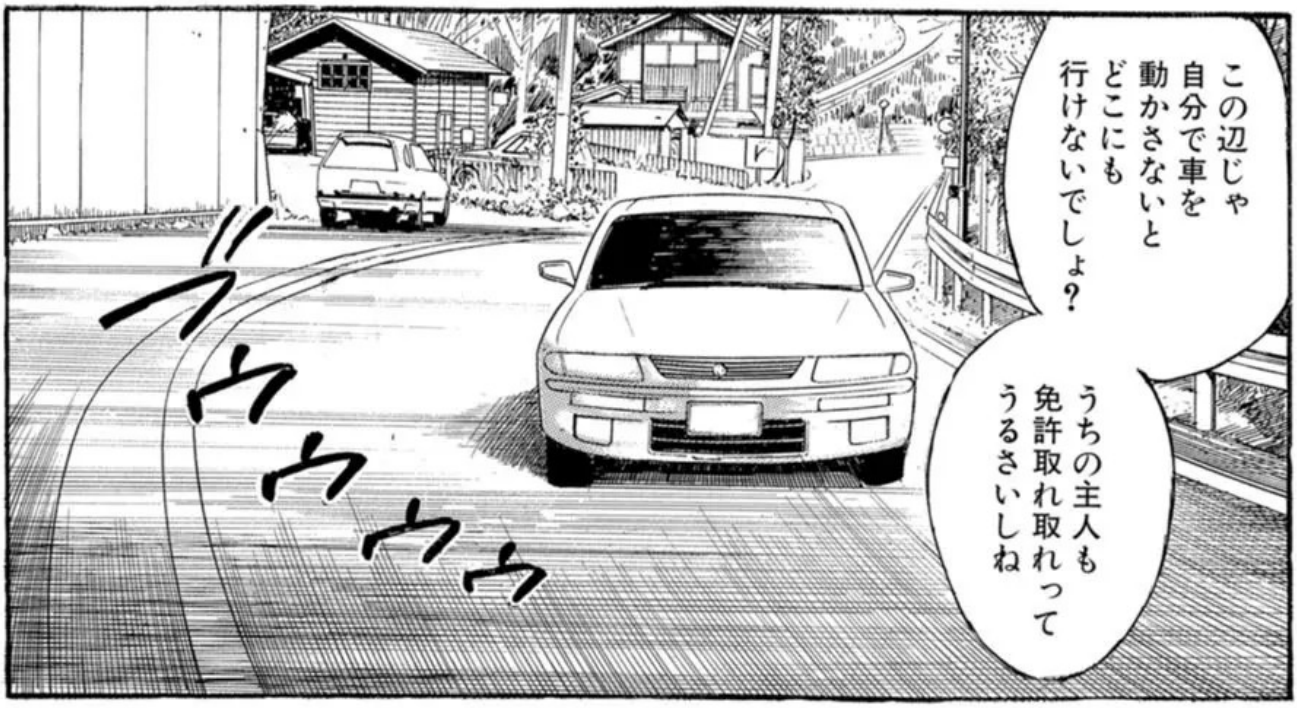
第２話




ブウウウ
キッ
おばちゃん
帰るとこかい？


あら
智史(さとし)くん
ウオオオ
へええ
おばちゃん
教習所に
通ってるんだ

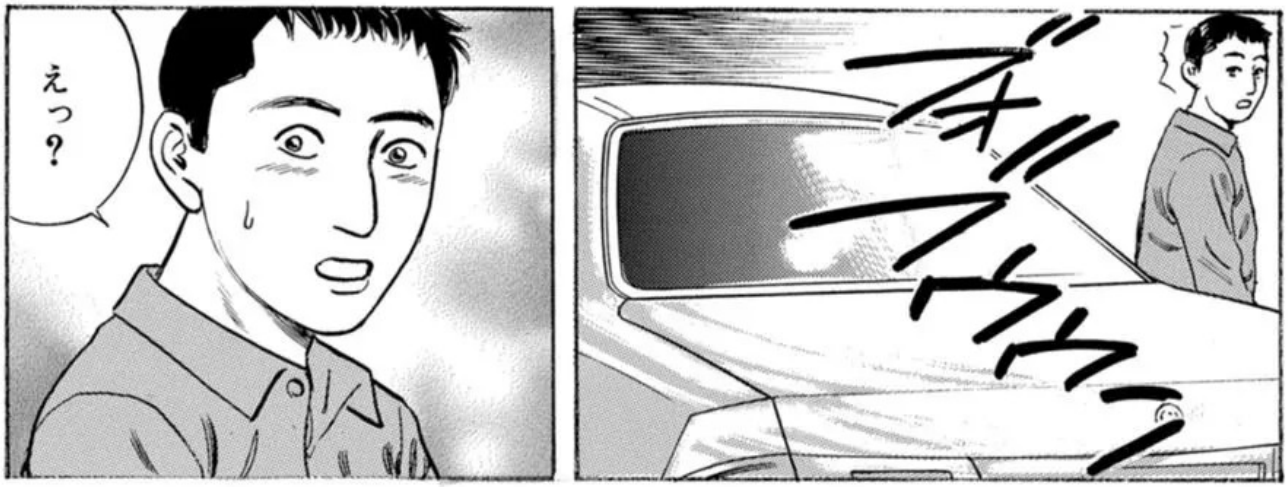

やっと仮免が
取れたところよ
へええ
そうなの


この辺じゃ
自分で車を
動かさないと
どこにも
行けないでしょ?
うちの主人も
免許取れ取れって
うるさいしね
ブロロロロ


どうせ
酔っぱらった時に
迎えに来させる気
なんだろうけど
でも けっこう
楽しいわ
教習所も
まわりは若いコ達ばっかりで
こんなおばちゃんでも
気軽に話しかけてくれるし
なんだか自分も
少し若返った気になるわ
おばちゃん
もとから若いよ
それに…
それに
…何？
ブオオオ


いや…
綺麗だなって
話だよ
あら 智史くん
いつの間にやら
そんな事も
女の人に言うように
なってたんだ
若い女の子の前じゃ
てんでしどろもどろで
いつもふられっぱなし
だよ
おばちゃんだと
こんな
気軽におべっかとか
言えるわけ？
いや…ほら
子供の頃から
知ってる顔だし
その辺は
なんて言うか…
キッ


ごめんおしっこ我慢できなくて
ふうう…
ジョロロ


えっ？
ブォォォォン

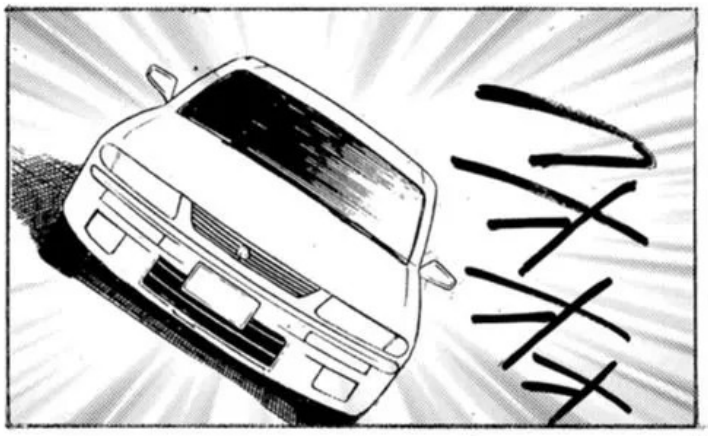

ちょっちょっとおばちゃんうっうそ…


早く乗って行くわよ


ウオ
オオ
やっぱり
教習所の中を
走るより
快適ね
あれ？
今
おばちゃん家
すぎちゃった
よ
もう少し
運転させてよ
ブウウウ


おばちゃん
ちょっと
飛ばしすぎじゃ
ないか？
ワオオォ


平気よ
道まっすぐ
だし


ワオオォ


ガチャ




初めて
教習所の外を
運転して
膝が少し
震えてるわ


興奮したせいで
なんだかわたしも
もよおして
きちゃった…


ねえ
智史くん
ミアアアアア


智史くんは
ずっとこの地元で
暮らしていくの？
んっ？


うん
そうかな


うちの子は
高校を卒業したら
東京の方に
出ていくと
言ってるわ


生意気に
ここに居ても
何も刺激がないとか
言うのよ


そんなもの
求めれば
どこにでも
あるものだと
思うんだけど
どう思う
智史くん？


そうだな…
確かに
刺激っていうのは
あまり感じる
ことはないよな


おばちゃんのお尻もちょっとした刺激にならないかしら？
こっちにおいでよ


いいから
いらっしゃいよ


おっ
おばちゃん


車の運転を
させてくれた
お礼よ


ピチャ


あっ
あっ


おばちゃんの
口の中
気持ちいい？


うっうん
でも もっと
気持ちのいいとこに
挿入(いれ)たいでしょ？

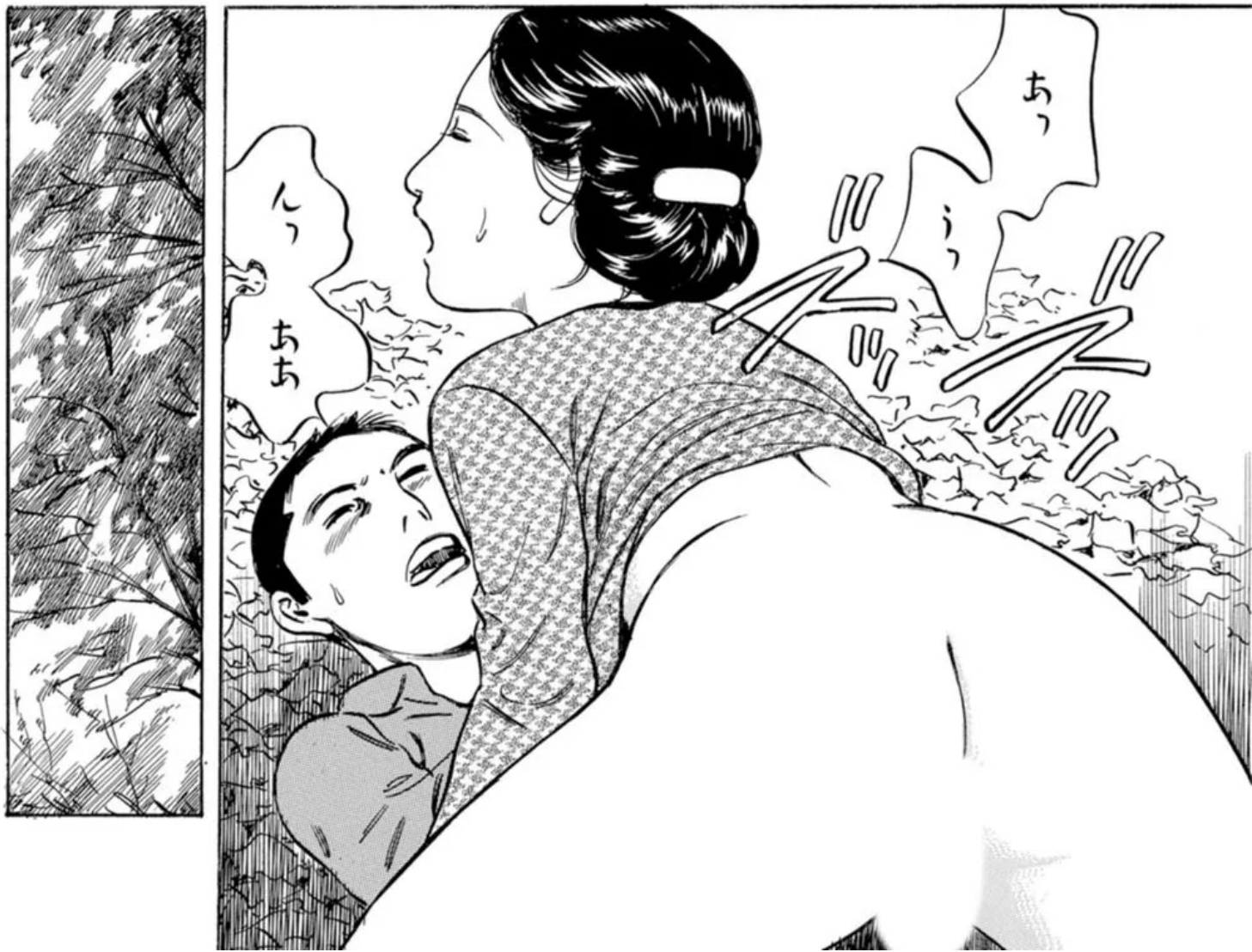

横になって
ごめんね
こんな所で
突然こんな真似…
わかるでしょ
おばちゃんのここ
いっぱい
濡れているの


あっ
うっ


はっ
あっ
あっ




いっいく
いいわよ
きて
このまま


あっ
うっ
んっ
あぁ


もう…
行こうか
うん
ブオオオオ
それじゃ
ありがと
智史くん


おばちゃん


今家に誰かいるの…
おじいちゃんがいると思うけど
俺ん家誰もいないんだ


嬉しいわ


おばちゃんの
ここ
そんなに
見たかったの


いいわよ
いくらでも
見て…
触って…


あぁ〜


ビキ


おばちゃん…
俺とまた…
いつでも
できると
思っちゃ
だめよ


おばちゃん
人妻なんだから


他人の車は
気をつけて
乗らなくちゃ
いけないでしょ?

誘う人妻にのせられて
～淫らに咲き乱れる熟した肢体～

第３話




ねぇ
あなた


飼いたいって？
犬かなにかか


あなたも
楽しめるモノよ


わたし
飼いたいモノが
あるんだけど

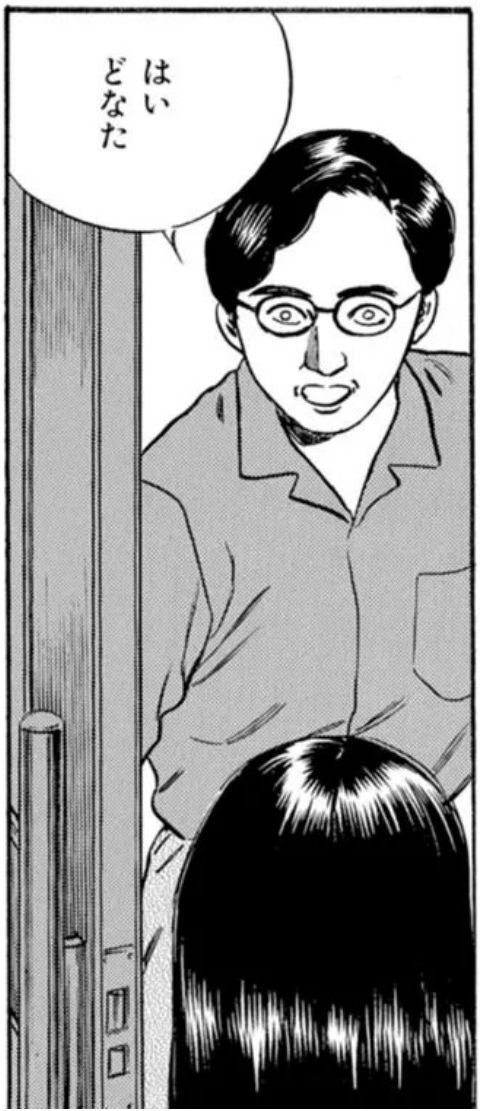

……
……？


パソパソ




おーい静江
客だぞ
いないのか


なんだよ
どこへ
行ったんだ


はい
どなた


どっ
どうも


野間晴彦先生で
いらっしゃいますよね


そうですけど
なにか？


あら
いらっしゃい


さぁ 中に
入って


おっ おい
静江
んん〜
ねぇ あなた
!?


なっなんだ
なんの真似だ
いったい


言ったでしょ
わたし飼いたいモノが
あるって


ばっ ばかな
ことを言うな


ほらあなたの
尊敬する先生に
足を広げて
お見せしなさいな




はっはい
奥様


早くなさい！
あっ


まだしつけが
なってないわよね
これからだんだんと
教えこまなく
ちゃあね

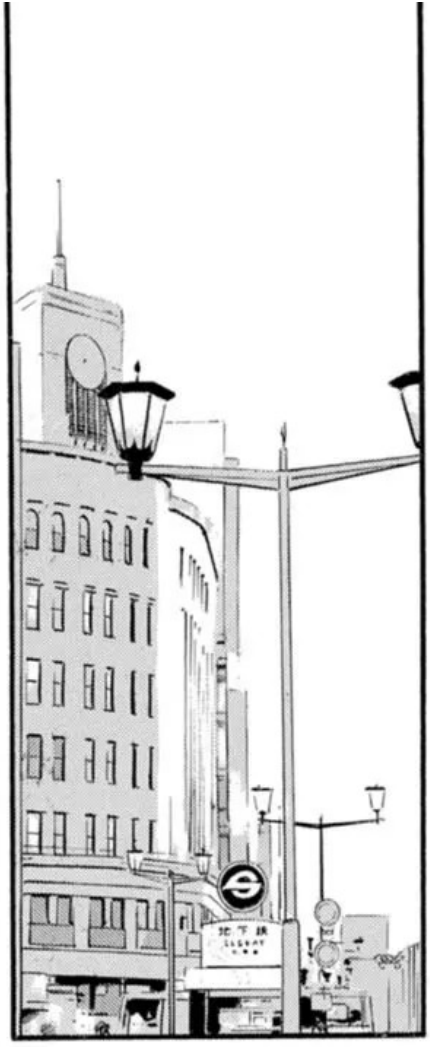

きれいな
ピンク色でしょ
ほら どお？


この娘
ずっとあなたの
小説の大ファン
だったそうよ


野間先生になら
犬のように
飼われても
かまわないって
言ってるの
どお
かわいいでしょ


仕事の
打ち合わせ
なんだ
ちょっと
出てくる


今まで君の
おかしな趣味に色々
つき合ってきたが
今度ばかりは
つき合いきれん
かもな

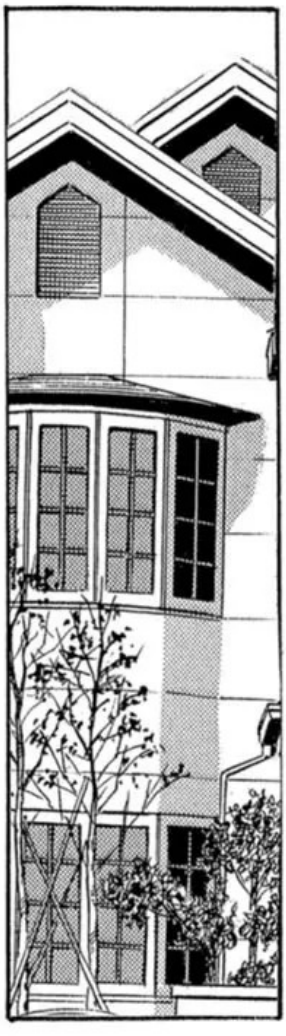



珈琲
珈琲
純喫茶
読者からの反響でしてね
野間晴彦の小説はこの頃軟弱になってきているんじゃないかって


特に女性の描写が昔に比べてやさしくなったと僕も感じるんですけどね


……年かな


今さら純文学ってこともないでしょ先生……






なにを
してるんだ


おかえり
なさいませ
先生


ここで先生の
お帰りを
待つようにとの
奥様の
お言いつけです


怖くなかったか
誰か知らない人でも
入ってきたら
どうしようかと
ドキドキ
してました
そうか


ドキドキしながら
感じていたのか
あ
はう
あう

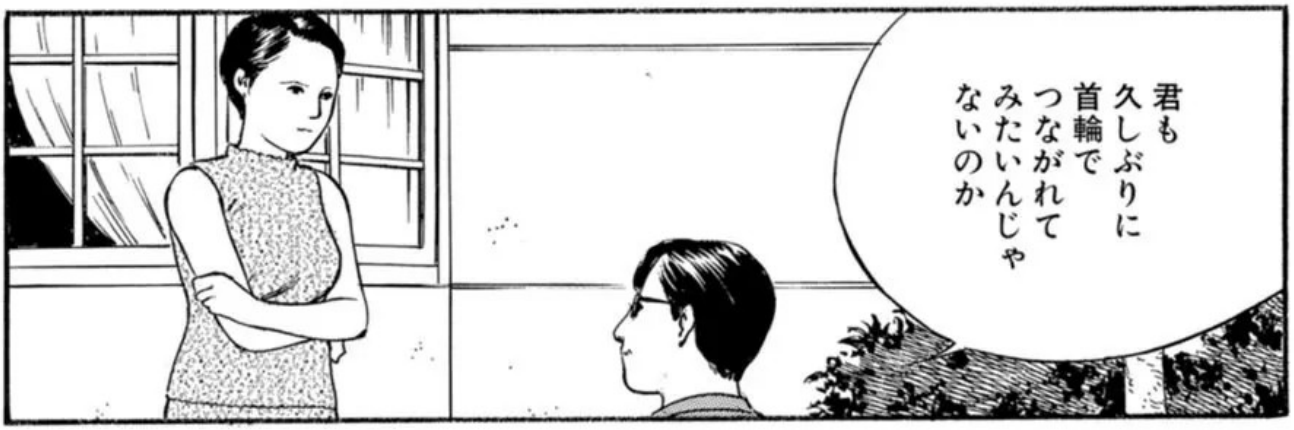

かわいいね
足を広げて
よく見せて
くれないか
さっきはあまり
見ることが
できなかったんだ
ほんとうに
綺麗な色だ
ああ
先生…


もう少し若い頃には
静江と二人で
こんなことをして
楽しんだものだよ
おっ奥様と
ですか？


信じられない
かもしれないが
あいつは
ああ見えても
Mなんだよ


ああ
庭の木に縛りつけたり
野外で放尿させたりとかね
させてたというか
僕の方が
彼女のプレイに
引きずられていた
んだが


なにを
話して
いるの
この娘の調教の
ためにも
きみのMの姿を
見せてやったら
どうかと思ってね


君も
久しぶりに
首輪で
つながれて
みたいんじゃ
ないのか


あなたが
そうしたいのなら
……


どうしたんだ綾
かまわないから
打て
あん


すっ
すみません
奥様
いいのよ
もっと
ぶって
あん
あっ


ん
あぁん


あぁ


ええ
とても


綾
楽しいかい


いいんですか？
奥様


IIRRRRR






最高ですよ先生
今回の作品は
ハードで
エネルギッシュな
野間晴彦が
帰ってきましたね
そうかね
なんだか
昔の感性が
甦(よみがえ)ってるんだな
この頃


ねえ
先生
綺麗でしょ
奥様のお尻に
花を飾って
さしあげたんです
そうだね
これからも
綾の色々なアイデアで
僕らを楽しませておくれ

END

誘う人妻にのせられて

～淫らに咲き乱れる熟した肢体～

鶴永いくお

© 鶴永いくお / 大都社 / 秋水社

▼秋水社の作品が 1 話無料で読める！

https://www.shusuisha.com/

▼著者へのお便り、作品に対するご感想は
上記サイト内お問い合わせページか
下記住所まで

〒112-0004

東京都文京区後楽 2-3-25 金子ビル 4F

※本作品の無断転載・複製・複写・上映 (インターネット上を含む) を禁じます。
※本書を第三者に依頼しスキャンや電子化することは一部の例外を除いて
著作権法上禁じられています。